

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370959

研究課題名(和文)チュニジア民主化革命の展開とその諸課題をめぐる文化人類学的研究

研究課題名(英文)An Anthropological Study on the Tunisian Revolution and its Problems

研究代表者

鷹木 恵子 (TAKAKI, Keiko)

桜美林大学・人文学系・教授

研究者番号：60211330

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の最終年度には、研究調査の成果を『チュニジア革命と民主化 人類学的プロセス・ドキュメンテーションの試み』と題する著書にまとめ、明石書店から出版することができた[総頁数530頁]。本書では、チュニジア革命の背景と要因の解明に始まり、革命の進行過程、ベンアリー政権の終焉、その後の民主化移行過程と新政権発足までを、開発学でのプロセス・ドキュメンテーションという手法を援用して論述した。

本書は、そのプロセスを多くの聞き取り資料に基づきつつ、それらを多声的、多所的、多面的に描き、またミクロ・メゾ・マクロの多次元との関連性も含めて、それらを一つの時間軸に乗せて描いた点で独創的であると考えている。

研究成果の概要(英文)： I published a book entitled "The Tunisian Revolution and Democratization: An Anthropological Process Documentation" from Akashi-Shoten in 2016 as a product of this research project.

In this book, I started considering the background and some socio-political and economic factors of the revolution, and traced the whole processes of the Revolution till the fall of Ben Ali regime and the democratic transitional period until the establishment of the new government, with a method of process documentation which is usually applied in the development studies. One of the original features of this work is that the processes are documented chronologically with the real voices of various Tunisian citizens interviewed by the author herself and presented in multi-vocal, multi-topographical and multi-sided ways. The documented data are also multi-dimensionally analyzed and considered. This is also the first academic book on the Tunisian Revolution in Japanese language.

研究分野：文化人類学

キーワード：チュニジア革命 民主化 文化人類学 プロセス・ドキュメンテーション 聞き取り調査 市民社会 女性の活躍 社会運動

1. 研究開始当初の背景

2011年のチュニジア1月14日革命は、その後、中東北アフリカの多くの国々にその影響を及ぼし、「アラブの春」とも呼ばれたように、中東現代史における大きな転換点となった。この「アラブ革命」や「アラブ動乱」とも呼ばれる民主化を目指した出来事に関しては、その後のその頓挫や失敗、さらには紛争や内戦も含めて、特にエジプトやシリア、またそれに続いて台頭することとなったイスラーム国(IS)などに関しては、日本でも少なからぬ研究がなされ、著書・論文が発表されてきた。しかしながら、そもそもその起点となったチュニジア革命やその民主化移行過程に関しては、それが数少ない成功例と捉えられるものでありながら、未だ十分な研究が為されていないという日本の中東研究の現状があった。

2. 研究の目的

こうした研究開始当初の日本の研究状況を踏まえて、本研究の目的は、中東現代史の大転換点となったチュニジア革命と民主化に関して、まず革命の歴史政治社会的背景や要因を明らかにするとともに、その後の民主化移行の過程と、文献研究とともに文化人類学的現地調査を踏まえて、できるだけ詳細に跡付けることであった。特に現地調査による多様な人々からの聞き取り調査を行い、また一部では統計資料も駆使し、チュニジア革命と民主化過程の紆余曲折を明らかにし、かつそれがもつ現代史的意義や今後の見通しについて、明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) この研究目的に向けて、まず現地へ赴き、チュニジア革命に関連した文献収集を行うとともに、現地のフィールドワークを繰り返し、デモや異議申し立てのストや座り込みの現場にも赴き参与観察を行うとともに、また全国各地の多様な市民、すなわち知識人や研究者ばかりでなく、若者や失業者、政治家や公務員、NGO活動家、会社員、自営業者、農民、商人、主婦など、多数の老若男女を対象に、都鄙を問わず各地で聞き取り調査を行ない、独自の資料収集に努めた。チュニジアのさまざまな文献資料や統計資料の収集については、一般の書店のほかに、国立図書館、国立統計研究所(INS)、女性調査研究資料情報センター(CREDIF)、アラブ女性研究センター(CAWTAR)、アソシエーション情報養成研究センター(IFEDA)などにも通い、文献資料収集を行った。

(2) またこれらの調査研究の内容を一冊の著書にまとめる執筆作業においては、開発学におけるプロセス・ドキュメンテーションの手法を援用して論述することとした。すなわち、革命の始まりとベンアリー政権の終焉、また民主化移行期と自由選挙に基づく新政

権発足までの一連の過程を、文献と多くの聞き取り調査内容を織り交ぜつつ、一つの現象であっても、それを多声的、多所的、多面的に跡付けることを試み、またミクロの事例を、メゾ・レベルそしてマクロ・レベルへも繋げて把握し論述するという独自の方法を考案し採用した。

4. 研究成果

本研究の最終年度には、『チュニジア革命と民主化 人類学的プロセス・ドキュメンテーションの試み』と題した一書にその成果をまとめて公刊することができた(明石書店、総頁数530頁)。

その著書の章立て構成は、序章と終章に加え、全7章から成るものである。序章では、まず上述の問題の所在と方法論について解説した。

第1章では、革命の背景にあった「二つのチュニジア」とも呼ばれる独立以降の政府開発政策の歪みと地域格差(沿岸部と内陸部、北部と南部、都市部と農村部)、大統領のベンアリー一族とその妻のトラベルシー族のネポティズムと盗賊政治、また警察国家とも言われる諜報活動や情報統制などがあったことを、一部は統計資料も駆使しつつ明らかにした。

第2章は、「チュニジア革命の始まりとベンアリー政権の崩壊」と題し、同国内陸部のシーディ・ブー・ズィードの町で野菜売り青年の抗議の焼身自殺を凶った事件、それに端を発した市民による抗議運動や反政府運動が、次第に全国へと広がりを見せ、最終的に23年間続いた独裁政権を崩壊させるに至った約1カ月の過程を跡づけ、また多様な市民の参加と軍の役割、当時の対外関係についての考察も行った。

第3章は、「革命後の民主化移行と制憲議会選挙でのナフダ党勝利」と題し、リーダーなき革命とも呼ばれたチュニジア革命とそれによる政権崩壊後、民主化移行過程に多様な市民が積極的に参加し、当初発表された大統領選挙の予定が変更され、新たに憲法制定に関わる議会選挙(制憲議会選挙)の実施が決定されたこと、その選挙でイスラーム政党のナフダ党が勝利することになった経緯を跡付けた。

第4章「ナフダ党連立トロイカ政権からカルテット仲介の「国民対話」へ」では、制憲議会選挙で勝利したナフダ党を中心に他の二党との連立によるトロイカ政権の発足と、その政権運営の下手さから、国家が「イスラミスト」と「リベラル派」へと分断化され、二極化する事態となったこと、そのなかでイスラミスト過激派による野党党員暗殺事件が起き、国家が危機的状況に陥った過程を明らかにした。しかしその危機は、四大市民団体の仲介による「国民対話」の実現によって打開されたことから、その経緯と過程を明らかにした。

さらに第5章「女性たちの活発な政治社会活動」では、革命と民主化移行期の過程で活発な政治社会活動を展開した女性たちの動きに焦点をあて、独立以降の政府の女性政策が「国家フェミニズム」と呼ばれるものであったとすれば、革命以降のそれは、まさしく「市民フェミニズム」と呼び得るものへと大きく変貌を遂げ、発展していったことについて考察し、その過程を具体的出来事とともに跡付けた。

第6章「新憲法制定と自由選挙に基づく新政権の発足」では、四大市民団体の仲介によって対立勢力間での「国民対話」が図られ、新憲法制定までのロードマップが決められ、無事に新憲法が制定されたこと、それを踏まえて国民代表者議会選挙と大統領選挙の自由選挙が実施され、新政権発足へと至り、これをもって革命の第一義的目標であった政治の民主化移行が無事に達成されたことを詳細に跡付けた。しかし、新政権発足直後に発生したバルドー博物館とスースのリゾートホテルでのテロ事件によって、観光産業がさらに大打撃を受けるなか、治安テロ対策と経済的な立て直しの二つがともに喫緊の重要課題となっている現状について明らかにした。

そして第7章「市民社会の力とトランスナショナルな連携」では、チュニジア革命がまさに市民革命と呼び得るもので、またそれが民主化移行という目的を達成し成功したと言えるのであれば、その背景には市民社会の活発な活動や多くのNGOなどの国境を越えたトランスナショナルな連携があったことを、文献・統計、そして現地調査による具体的諸事例に基づき明らかにした。

終章「チュニジア革命の意義と今後の展望」においては、本章で論じてきたことをまとめるとともに、それらを踏まえ、チュニジア革命のもつ現代史的意義として、それが多様な市民の参加によって達成されたこと、武力行使よりも主にコンテンツヤス・ポリティックス（論争政治）に基づいて民主化移行が進んでいったこと、さらに外国の介入がごく少なかったことについて述べた。他方、ISへの外国人兵士の国別参加者数ではチュニジア人が最多であるなど、民主化移行達成後も治安・経済対策に加えて、若者層に対する対策など、多数の課題を抱えていることと、今後の展望について述べた。以上が本研究の成果をまとめた著書の内容である。

この著書の他に、革命直後に地方のオアシス地帯で勃発した土地紛争を取り上げ、それが独立以降の歪んだ政府開発政策が要因となったものであったことについて、「チュニジア政府開発政策と革命後のオアシス農地紛争」と題した論文を執筆し、関根久雄編『「開発と感情」の人類学』に収録刊行された。また革命期や民主化移行過程での特に女性たちの活動は、目覚ましいものであったことから、その動向を歴史人類学的に検討し、

「チュニジア革命と民主化移行期における女性たちの活動 国家フェミニズムから市民フェミニズムへ」と題した論文にまとめ、『国際学研究』に掲載された。

また2016年は、チュニジアの家族法に当たる『個人地位法』(1956年制定)が制定されてからちょうど60周年目であったことから、女性の権利拡大を要求してこの法の改正に向けた動きが多くみられたことから、その動向に関して検討し、「チュニジアにおける『個人地位法』制定から60年目の論争 相続の男女平等と女性の配偶者選択の自由をめぐる」と題した論文を、『中東研究』に発表した。

著書刊行後には、招待公開講演会や国際会議のモデレーターなどの依頼を受けて、そうした社会活動も行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

鷹木恵子、「チュニジアにおける『個人地位法』制定から60年目の論争 相続の男女平等と女性の配偶者選択の自由をめぐる」、『中東研究』(査読有)2017年、No.528: 73-85.

鷹木恵子、「自著を語る『チュニジア革命と民主化 人類学的プロセス・ドキュメンテーションの試み』」、『地中海学会月報』397、2017-2、7.

鷹木恵子、「チュニジア革命と民主化移行期における女性たちの活動 国家フェミニズムから市民フェミニズムへ」、『国際学研究』(査読有)、2016年、第6号: 11-30

鷹木恵子、「人間学のキーワード マイクロクレジット」、『月刊 みんぱく』(査読有) 2015、7月号 20.

鷹木恵子、「国家フェミニズム」から「市民フェミニズム」へ:チュニジア民主化移行期の変容、『地中海学会月報』381-11 2015/6-7.

〔学会発表〕(計9件)

鷹木恵子、「V. Moghadam Globalization and Social Movements を読む」科研「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究」公募研究班「開発とトランスナショナルな社会運動」第3回研究会、2017.2.25、桜美林大学千駄ヶ谷キャンパス(東京都・渋谷区)

鷹木恵子、モデレーター、「ドーヴィル・パートナーシップ 中東・北アフリカ地域における女性の経済・社会・政治的役割の推進に関する国際シンポジウム」外務省主催国際会議、2016.12.12、品川プリンスホテル(東京都・品川区)

鷹木恵子、「チュニジア革命と民主化」

チュニジア共和国大使館主催出版記念
公開講演会 2016 .11.25、在日チュニ
ジア共和国大使館（東京都・千代田区）
鷹木恵子、" Women 's Role in the
Tunisian revolution and the
Democratic Transition: From State
Feminism to Civil Feminism." United
Nations CSW60 Parallel Event *Women 's
Social Lives and Changing Values in
the Middle East: Beyond the Framework
of Religion, Culture and Tradition*,
March 18, 2016, Church Center United
Nations Plaza

（アメリカ合衆国、ニューヨーク）
鷹木恵子、「チュニジア革命とジェンダ
ー・イシュー」、笹川平和財団「イスラ
ームと価値の多様性：ジェンダーの視点
から」共同研究会・公開シンポジウム「イ
スラーム・女性・ジェンダー：価値の多
様性とダイナミズム」、2015.3.28、明
治大学リバティタワー（東京都・千代田
区）

鷹木恵子、「アルジェリアにおける平和
的イスラーム運動 - アラーウィー教団
の事例を中心に - 」日本アルジェリア協
会講演会、2014.11.14、在日アルジェ
リア大使館（東京都・目黒区）

TAKAKI, Keiko, " Un paradigme pour le
développement durable: *Kaizen* et
l' expérience japonaise." *Congres
International Féminin pour une
Culture de Paix*. 25 october 2014,
Centres des Conventions at Oran (ア
ルジェリア・オラン)

鷹木恵子、「チュニジア革命と民主化過
程での女性たち」、PARC 自由学校講演会、
2014.10.04、PARC 自由学校（東京都・千
代田区）

鷹木恵子、「チュニジア革命と民主化過
程におけるジェンダー・イシュー」笹川
平和財団「イスラームと価値の多様性：
ジェンダーの視点から」共同研究会、
2014.4.12、桜美林大学四ツ谷キャン
パス（東京都・新宿区）

〔図書〕(計7件)

鷹木恵子、「開発とトランスナショナル
な社会運動」、長沢栄治編『イスラーム・
ジェンダー学の構築に向けて』日本学術
振興会科学研究費基盤研究(A)イスラ
ーム・ジェンダー学のための基礎的総合
的研究(非売品)東京大学東洋文化研究
所、2017.3.27. 189(140-144).

鷹木恵子、明石書店、『チュニジア革命
と民主化 人類学的プロセス・ドキュメ
ンテーションの試み』2016、530

鷹木恵子、大月書店、長沢栄治・栗田禎
子編『中東と日本の針路 「安保法制」
がもたらすもの』「オルタナティブな積
極的平和主義をめざして」、2016、259

(248-250)

TAKAKI, Keiko, " Un paradigme pour le
développement durable - KAIZEN et
l' expérience japonaise," *Parole aux
femmes: Actes du congrès internatio
nal féminin pour une culture de paix*.
2016, 449(351-356)

鷹木恵子、春風社、関根久雄編『実践と
感情：開発人類学の新展開』「チュニジ
ア政府開発政策と革命後のオアシス農
地紛争 開発過程で変化する感情とそ
の論理」、2015、375(305-343)

鷹木恵子、丸善出版、国立民族学博物館
編『世界民族百科事典』「教団」、2014、
789 (150-151)

鷹木恵子、昭和堂、日本アフリカ学会編
『アフリカ事典』「北アフリカ」、2014、
655(616-619)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鷹木 恵子 (TAKAKI, Keiko)
桜美林大学・人文学系・教授
研究者番号：60211330

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()